スエーデン語が必修となった。また、約3分の1の児童が第3の外国語を選択科目として履修する。1989年の語学教育審議会の答申によると、貿易・産業・工業振興の上で、英語とスエーデン語が最重要であり、ドイツ語、フランス語、ロシア語、スペイン語が続く。

フィンランドの外国語教育の現状

総合制学校は9年間の義務教育機関であり、1学年から6学年までがLower Stage，7学年から9学年までUpper Stageである。第1外国語はLower Stageから週2時間履修する。母語以外の英語、フランス語、ドイツ語、ロシア語、スエーデン語／フィンランド語の中から1つが選択必修である。ちなみにフィンランド語を母語とする者は94%、スエーデン語は6%である。Upper Stageでは、第1第2外国語が必修であり、第3の外国語を選択履修する。1992年の答申により、総合制学校における必修外国語2ケ国語のうち、1ケ国語は、英語とされた。EU統合に伴い、イタリア語、ギリシャ語も選択科目に加えられた。また、歴史、地理、文学、数学、理科等の科目において外国語を用いて教えることが提唱されている。特に、外国語学習におけるオーラル・コミュニケーション能力の養成が、特に重視されている。教育省は1994年から新しいカリキュラムを導入。英語は、第1外国語として小学校において90%以上の児童が学習している。

フィンランドにおける英語教育の成果

大学生の英語能力の評価資料として、TOEFLスコアの国際比較リストが挙げられる。

TOEFL平均スコアのEU・国際比較
1008－99年データ

オランダ	616	デンマーク	606
ベルギギー	602	オーストリア	596
フィンランド	594	ドイツ	594
ルクセンブルグ	601	スエーデン	589
ノルウエイ	589	ポルトガル	575
チェコ	570	イタリア	551
スペイン	561	ポーランド	559
フランス	556	ギリシヤ	547
日本	496		



ウスペンスキー大聖堂（1868建立）
ヘルシンキ・フィンランド

歴史の都ウィーン

法学部
北嶋　繁雄

（1）その歴史

ウィーンは言うまでもなくオーストリアの首都、ドナウ川のほとりの歴史的都市であり、周知の芸術の都、そして今は観光の都市でもある。

歴史的に説明すれば､オーストリア（Austria, Österreich）という国名はフランク王国のカール大帝が東方のアヴァール人を征服し、Ostmark（東方辺境区）を設置したのが始まりで、その地域が996年ドイツ国王オットーIII世の証書の中で、当時の俗語でOstarrichi（「東方の国」）と表記される。1147年国王コンラートIII世がウィー

ン郊外にあるクロスターノイブルク修道院に与えた証書に“Austrie Marchio”（オーストリア辺境伯）という表記が見られる。国名の起源は10世紀に遡るといえる。

12世紀、オーストリア辺境伯はバーベンベルガー家（Babenberger）で、1156年辺境伯領から大公領に昇格されて、オーストリア大公になった。1246年バーベンベルガー家が断絶し、1251年ベーメン国王オタカールII世がオーストリアを領有する。1278年オタカールII世がハプスブルグ家のルードルフI世に敗北し、以後640年にわたってハプスブルグ王家の支配が続くことになる。

首都ウィーンの起源はローマ帝国の時代に遡る。紀元100年頃ローマ軍の駐屯地Vindobonaが建設され、この地名がWienにつながる。ウィーンから東へ列車で約1時間ほどのところにペトロネル・カルヌントゥムという村があって、ここにローマ軍の駐屯地Camuntumの遺跡があり、現在も発掘が続いている。Vindobona, Carnuntumはドナウ川を前にしたローマ帝国北辺の最前線基地であった。180年五賢帝の最後、哲人皇帝といわれるマルクス・アウレリウス帝がゲルマンのマルコマンニ族との戦いで、陣頭指揮をとりヴィンドボナで陣没したといわれる。

ウィーンは12世紀にオーストリア大公の居住地となり、ハプスブルグ王朝の下では神聖ローマ帝国の首都として繁栄の道を辿ったのである。

（2）ウィーンという街

現在のウィーンの街並みは、1857年12月の皇帝フランツ・ヨーゼフI世の都市改造令によって今日の姿になったといわれる。フランツ・ヨーゼフI世は1848年12月僅か18歳で即位し、1916年11月27日治世68年、86歳で生涯を終える。在位の長ざでは、ヴィグトリア女王三昭和天皇も似ている。この皇帝ほど公私にわたって不幸を経験した皇帝もいないといえる。彼自身、即位の5年後、当時まだウィーンを囲んでいた城壁の上で刺客に襲われ、危うく難を逃れた暗殺未遂事件（1853）にあう。そしてこの事件が都市改造令を出すことにつながったともいわれる。1868年には、弟のマクシミリアンが雇われ皇帝として出かけたメキシコで革命の犠牲となって銃殺された。さらに、嫡子ルドルフは1889年1月にギリシア系の男爵令嬢マリー・ヴェッツラとウィーンの南西マイアーリングの狩猟用別館で自殺する。この自殺の原因は皇太子と皇帝の不和、恋愛問題、或いは政治的背景などいろいろ取り沙汰されたが未だによく分かっていないという。その上、最愛の美しい皇后エリザベートは1898年ジュネーヴでイタリアのアナーキストの青年に暗殺されている。この美貌の皇后は今もウィーンでシシィの愛称で人気があり、その彫像や肖像画はマリア・テレジアのそれとならんでよく見かけるし、ミュージカルも上演されている。最後に、帝位継承者と定められていた甥のフェルディナント皇太子を1914年6月28日サラエポで失う。この事件が第1次世界大戦の引きがねになったことは周知のところである。このフランツ・ヨーゼフI世がオーストリアに残したもの、それがウィーンの都市改造、美しい帝都の完成であった。

1857年暮れの都市改造令でウィーンの近代都市への拡張が始まり、城壁を取り壊したあとを環状道路（リングシュトラーセ）とし、美しい並木の続く広々とした道路と両側に六階建て程の高さでほぼ統一された建物の立ち並ぶ街並みになる。

リングシユトラーセに沿って、ルネサンス様式の宮廷オペラ劇場（現在の国立オペラ座）、新宮殿Neue Hofburg、美術史博物館Kunst historisches Museum、それと向かい合わせ一対となっている自然史博物館が建ち、次いで国会議



事堂のギリシア様式の壮麗な建物が続いて、隣り合わせて市庁舎Rathausのゴシックの尖塔がシュテファン・ドームの塔と競うかのように聳え、市庁舎前広場をはさんで、向かい側には新古典主義様式のプルクテァターが荘重な趣で建っている。そしてリングシュトラーセをはさんで斜め向かい側にはルネサンス様式のウィーン大学の本館Hauptgebaudeがあり、市民にUni．と呼ばれて親しまれている。オペラ座から大学まで、歩いて30分もかからないような道筋にこのような公共の壮麗な建物が立ち並んでいる都市景観は他には見られないであろう。ウィーン・フィルハーモニーの本拠、楽友協会ホールもオペラ座から5分ほどのところにあり、そこから10分も歩けばコンツェルト・ハウスがある。市民はリングシュトラーセに沿って文化的生活を享受できるのであり、日本では経験できないウィーンの良さであろう。またこの環状道路に沿ってStadtpark、Burggarten、Volksgarten、といった緑濃い美しい公園が市民の憩いの場所となっている。

これらの建物は19世紀の後半、すぐれた建築家達のコンペ方式で設計を募り建築した。オペラ劇場はシカールツブルクとヴァン・デーア・ニュルという二人の建築家の共同で1861年12月から工事が始まったが、内装をめぐって対立し中傷合戦などあり工事が遅れた。そして皇帝がふともらしたという批判の言葉がもれて、それを聞いたヴァン・デーア・ニュルは大変ショックを受け、建物の完成を待たず68年4月に自殺してしまう。これは皇帝にもショックだったようで、「以後50年間、皇帝は人前では自分の意見をもらさなくなり、いつも『まことに見事だった。余は実に嬉しく恩う。（Es war sehr sch嗜，es hat mich sehf gefreut．）』というだけ」になって、これが人々の流行語になったという。

ウィーンの教会、官殿、一般の建物はバロック様式の華麗さを留めている。入口や屋上に見られる彫像や彫刻は装飾過剰にも恩われる。ヘルマン・ブロッホば「ウイーンの陽気な黙示録」という文章の中で、ウィーンは「……芸術の都どころか第一級の装飾の都市であった。装飾性にふさわしくウィーンは朗らかであり、しばしば白痴的に朗らかであった」という。そしてウィーンにはこの装飾を許される資格があったのであり、それは「装飾がオーストリアの音楽・演劇の伝統の中に最も純粋で美しい効果を残しているからだ」という。ウィーンにはハプスブルク王朝文化の余韻が今日に伝わっているのであり、それが外から訪れる私たちを魅了し、楽しませてくれる。

この街の印象について、人々が語っているが、一様に女性に譬えている。「ウィーンを支配するのはゆるやかなかたまりであり、球形である。これは女体だ。きわめて女性的な肉体だ」（池内紀）、「若い栄華のままに正装し、厚化粧した老婆」（中野孝次）、「憂愁ただよう中年の女性のような」（塚本哲也）といった具合である。池内氏の印象には、「世紀末ウィーン」のどこか頽廃的な雰囲気が重なるようである。これらは、男性のみたウィーンの印象であり、女性からみたらどうなのか、残念ながら女性の印象記を読んでいないので何ともいえないが、男であれ女であれ、受ける印象は同じではないかと恩う。日本から行って、誰しもヨーロッパは空気が乾いていると思う。女の人は肌があれるとかいう。そうした乾いた透明な大気の中で、しかも初夏の明るい陽ざしを浴びながら、カスターニエン（橡の木）やフリーダ（ライラック）の花などを抜けるような青空の下で見、その背景にくっきりとした尖塔や家並みを眺めるとつくづく美しい街だと思う。そして明確な輪郭の中に柔らかさを感じさせる点で、ウィーンは女性的円型都市なのかもしれない。

（3）今日のオーストリア

1938年オーストリアはナチス・ドイツ（ヒトラーはオーストリア生まれ）に併合され、45年第二次世界大戦敗北後、中立国家として再出発する。現在EU（ヨーロッパ連合）に加盟しているが、NATOには加わっていない。最近コソポ紛争で、ユーゴースラヴィアをNATO空軍が爆撃したが、オーストリアはNATO空軍機のオーストリア領空

の通過を許さなかった。

19世紀半ばオーストリア・ハンガリー二重帝国を形成し、過去ベーメン（チェコ、スロヴァキア）、ハンガリーを支配下におく多民族国家であり、東方のスラヴ民族と西方のゲルマン民族の狭間にある中欧の国家として長い歴史を辿っている。オーストリアは国家としての、またオーストリア人としてのアイデンティティー（存在証明）を常に問いかけているようであり、中立国家として存在することにそれを求めているのではないか。それが歴史からオーストリアが得た叡知でもあろう。私が滞在していた95年8月ボスニア・ヘルツェゴヴィナの紛争が燃え盛っていた。8月4日クロアティアが突如クラジナの奪還をはかってセルビア勢力に攻撃をしかけ、全面的戦争の危機に陥った。翌日、ウィーンの大衆紙Kurierに次のような言葉が見えた。「たとえ、歴史は単純に繰り返さないとしても、我々は常にバルカンがかって一度全世界を火の中に投げ込んだことを忘れるべきではない。」

1914年サラエボで、皇太子夫妻がセルヴィア人青年に暗殺され、第一次世界大戦の引きがねになったのであり、バルカンの火種の怖ろしさはオーストリア人には身に泌みている筈である。

（1999年3月28日、記）



英国の食べ物
—私の体験から—

法学部
三好　正弘

英国に15年も住んでいた一日本人記者によれば、英国のレストランの料理が最近格段においしくなったという（黒岩徹「プレアのイギリスはおいしいぞ」『諸君！』1999年2月号）。英国人は自分達の食べ物を世界でも不味いものの代表と自認してきたフシがあり、私も初めての梅外滞在経験をした1970年夏に、同じ程度の中華料理をハーグ、パリ、ロンドンと食べ比べてみて、ロンドンのが一番不味かったという印象がある。

しかし、住めば都で、その3年後にロンドンの南郊に2年間住んだときは、食べ物の不味さは気にならないで過ごした。月曜から金曜までの昼食は大学の食堂で普通の英国料理を食べていた。我が家の子供達も近所の小学校で給食を食べ、今日はデザートが○○だったよ、などといって大いに楽しんだようだった（このために毎週月曜日に1週間分のディナー．マネーを学校に持参した）。魚好きの私は、大学食堂でも鰊のムニエールの出る木曜日（これはロンドン・スクール・オブ・エコノミックス）と、直径6―7センチで厚さ1センチほどの円盤の鱈子（缶詰か）の醤油煮ともいうべき料理の出る金曜日（これは私の所属したキングズ・コレッジの食堂が金曜日に肉を避けたため）がとくに楽しみだった。瀬戸内生まれの私には、鰊の美味さは生まれて初めての発見であったかもしれない。これに味をしめて近くの朝市で生の鰊を見つけ、自宅で塩焼きを作ったこともある。ほかに、鱈が主な材料だが、フィッシュ・アンド・チップスがある。これは、あるいは上流階級の人達にほ敬遠されるものかもしれないが、私